



滋賀医大の新体制決定 2
 退任教授「在任中の思い出」 3~4
 抱負を語る 5~6
 吉川隆一前学長大いに語る 7~10
 留学私話 11

医 7 期生卒後 20 年同期会 12
 医 17 期生卒後 10 年同期会 13
 看 6 期生卒後 5 年同期会 14
 看護学科交流懇談会 15
 LITTLE WINDOW 16



新学長に馬場忠雄先生

— 副学長に服部隆則先生、病院長に柏木厚典先生がご就任 —

(関連記事2頁)

■「西医体」応援キャンペーンが始まります!

暑い、暑い夏!!

昨年からはじめた「西医体」応援キャンペーンが、今年も始まります。

多数の応募をお待ちしております。

応募方法は、<http://www.koikia.org> または、16頁をご覧ください。

■平成 20 年度版「会員名簿」を発行します

資料提出にご協力ください。(関連記事 10 頁)

■「湖医会」年会費の支払いが便利

自動引落しが可能になりました!



同封の申込用紙をご利用ください

■メールアドレスをお知らせください

会員への情報提供は、メールで連絡する機会が多くなっています。

まだ「湖医会」に登録されていない方 koikia@koikai.org に

アドレスをご連絡ください。

■「勤務医師賠償責任保険」の保険料が 15% off に! (関連記事10頁)

滋賀医大の新体制決定

3役抱負を語る

学長就任にあたって 学長 馬場忠雄

1964年3月 京都府立医科大学卒業
1969年3月 京都府立医科大学大学院修了
1978年10月 滋賀医科大学医学部第二内科講師
1985年7月 滋賀医科大学医学部内科学第二講座 助教授
1994年5月 滋賀医科大学内科学第二講座 教授
2001年4月 滋賀医科大学 副学長
2004年4月 国立大学法人滋賀医科大学理事
(教育等担当)・副学長
2008年4月 国立大学法人滋賀医科大学 学長

吉川隆一前学長の後任として本年4月1日より学長職を務めることになりました。本学には1978年10月附属病院の開院とともに勤務しており、地元草津の出身でもありますので、本学の教職員の方々をはじめ地域の皆様にも一層のご支援をお願い致します。

法人化後5年目に入り、まずは吉川前学長のもので進めてこられた第一期中期計画を着実に遂行し、国立大学評価委員会から高い評価が得られるように仕上げたいと考えています。大学の使命は教育研究の充実であり、またその成果を附属病院で活かすことであると考えています。これらを基本に学内の意見を集約して二期目の中期目標と計画を立て、先輩諸兄姉がこれまでに築いてこられた実績をさらに発展させるべく懸命に努力しますので、「湖医会」会員の心からのご協力を願っております。

副学長就任にあたって



副学長
服部隆則

1970年 京都府立医科大学卒業
1974年 同大学院修了
1980年 福井医科大学助教授
1988年 滋賀医科大学教授 胃癌研究がライフワーク

この度、副学長（教育・研究・厚生補導担当）を拝命いたしました。この20年間、病理学講座の教授として講義と研究に当たってまいりましたが、大学運営の一翼を担う職に就き、その責任の重さを痛感しております。

本学の教育理念は、医倫理を身につけ、科学的探求心に富んだ医療人の育成であります。国立大学が法人化され、教育や研究の更なる効率化が求められるようになりました。旧来の授業と実習を見直し、年々発展する医学に対応したカリキュラムに改善しようと考えております。本学では生活習慣病、神経難病、サル疾患モデル、MR研究、地域医療支援研究などを重点領域研究としてまいりましたが、癌研究も精力的に推し進める必要があります。多くの課題がありますが、本学を発展させるべくベストを尽くす所存であります。湖医会の皆様方の積極的なご支援とご協力をお願いいたします。

“地域に生かされ、世界に羽ばたく” 附属病院の新しい未来をめざして



病院長
柏木厚典

1971年 大阪大学医学部卒業後、約2年間NIH留学
1995年 滋賀医科大学第三内科助教授
2001年 同大学内科学講座教授（内分泌代謝学）に就任
日本内科学会、日本糖尿病学会、
日本動脈硬化学会、日本病態栄養学会などの
理事を歴任
2009年5月 第52回日本糖尿病学会年次学術総会会長予定

滋賀医科大学同窓会「湖医会」の会員の先生方には、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、2008年4月1日付けで滋賀医科大学医学部附属病院長を拝命いたしました。現在責任の重大さ、困難さをかみ締めているところです。

本院は1993年に森田陸司前病院長のもとに新病院管理体制となり、近代型病院への転換が図られ、病院機能の向上と経営基盤の充実化が進められて参りました。特に機能集約型診療体制の充実が図られ、手術件数が年間5600件に増加し、7対1看護体制も達成し、診療単価が飛躍的に増加しています。更に昨年9月D病棟が新設され、漸次病院再開発が進行しています。今後医療安全を更に重視し、手術部や救急部機能の拡充、地域医療連携、先進医療の推進を積極的に進めます。

そのような日頃の着実な努力により、本院が“地域に生かされ、世界に羽ばたく高度医療を推進する専門病院”として更に発展するよう努力いたします。「湖医会」会員の先生方におかれましては、是非倍旧のご支援をお願い申し上げます。

医師の労働と健康について



前社会医学講座予防医学部門 教授
西山 勝夫

1972年に関西医大助手から滋賀医大予防医学講座の助手に転任し、働く人々の労働と健康に関する探究・教育・実践に専念して、去る3月31日定年退職を迎えることができました。中でも社会医学フィールド実習は思い出に残るものです。同窓の皆さんはじめ多くの方々の支えのおかげと感謝しています。

関西医大研修医の過労死を契機に、労働負担・疲労に関する講義では、学生諸君の身近な問題としてこの話をしてきました。社会医学フィールド実習で滋賀医大研修医の調査を希望したグループが生まれました。その調査結果は、滋賀医大の研修条件の改善にいかされ、新臨床研修制度導入前の実態を表すものとして、学術論文にもなりました。

国立大学は、2004年の法人化でかなりの労働条件が、国ではなく、各大学の労使で決定される制度に変わり、自らの職場で自身が授業の通り実践するかどうか直面に、教職員団体の結成に私は参加することにしました。健康を害する長時間残業は、少なくとも毎年労使協定を締結しないと違法になるので重要な課題でした。

しかし、折角締結された協定が遵守されないという違法状態の解消の目途が立たず、教職員団体として大津労働基準監督署に申告することになりました。その結果労基署の調査、勧告があり、約1億円の不払い残業賃金が清算される事になり、長時間労働の改善に一定の貢献ができたものと思います。

全国的には最高裁で確定した関西医大の過労死の後も多数の医師の過労死や過労自殺が発生し、労災認定される事態が続いています。名ばかりの管理職は滋賀県の県立病院でも最近指弾されました。これらは昨今の医師も日本特有の過酷な労働条件と無縁でないことを示しています。

このような厳しい状況の中でも、同窓の皆さんが互いに連帯していつまでも健康で人々から信頼され、良質の医療を提供できる素晴らしい医療人として働き続けられることを願うほかありません。



…老兵は死なず、ただ消え去るのみ…

前産科学婦人科学講座 教授

野田 洋一

この度、3月末日を以て滋賀医科大学を定年退職する事になりました。寂しくはありますが、また同時に、ほっとしているところ です。

振り返りますと、1993年2月1日に着任して以来、15年と2か月、本学に在籍したことになります。

これまで可能な限り多数の医局員を獲得し、病棟での初期研修や学外の後期研修を注意深く設定し、優れた臨床医を育てるべく努めて来ました。現在でこそ産婦人科は医師不足ですが、15年前滋賀県下では全ての病院の産婦人科の定員が充足していました。そこで、我々の講座では病棟の2年間の初期研修を終えた医局員を、東京大学・慶應大学など関東にある症例数の多い病院へ派遣し、より高度で濃密な仕上げの研修が出来るように配慮しました。多くの諸君が関東へ出向いて、十分な研修をして帰って参りました。帰って来た諸君には自負心が芽生え、それぞれ立派に成長しており、私よりも遙かに目も手も頭も鍛えられた臨床医が多数誕生いたしました。私はこのもくろみがうまくいったと考え、とても誇りに思っております。

このように、臨床医を育てることに配慮する一方、滋賀医科

大学発の新しい仕事や新しい物の考え方を社会に問いたいと常々思っておりました。しかし、研究室に多くの人材が集まることは、この15年間とうとう一度もありませんでした。そんなこともあって、滋賀医科大学産婦人科発の仕事は、臨床研究に集中しています。我々が手がけた仕事をいくつかのキーワードで表しますと、以下の如くなります。「二段階胚移植法」、「動注化学療法の再評価」、「排尿障害や排便障害からの脱却」、「産科DIC救急班の結成」及び「滋賀医科大学産科オープンシステム」などです。

ここから先は、新しく産婦人科医を目指す本学の学生諸君や大学を支える構成員の仕事でしょう。

本学の輝かしい未来を信じ、皆様の健闘を期待します。お元気で…。



時の流れを思うとき、定年退職

前基礎看護学講座 教授

佐伯 行一



滋賀医科大学で過ごした30年近くの日々を思い返したとき、実に様々な事が頭に浮かんで来る。中でもパソコンとインターネットの普及ならびに国立大学の独法化が際立っている。後者については、いわゆる「2009年問題」が現実味を帯びるなか「競争的環境の中で個性輝く大学づくり」が滋賀医科大学でどのように実現されていくのか大いに気になるところである。

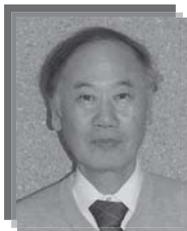
前者については、私自身の日々の生活を一変させた。現役時代、日々の生活でそのように強く意識したことは無かったように思うが、今振り返ってみるとその感慨は大きなものがある。

その第一は、論文や手紙などの書類書きの効率が著しく向上した。特に、入学試験問題の作成には多大な労力と時間を費やしたことが懐かしく思い出される。未だ滋賀医大に赴任していなかったが、医大開学時から入学試験問題の作成に携わっていた。当時は大学紛争が未だ完全に終結しておらず、入学試験の妨害を想定して、前期・後期試験それぞれに予備の問題を作る必要があった。それもすべて手書きであり、各自持ち寄った

問題は、会議終了時には赤鉛筆による修正や加筆によって文章の順序すら読み取りにくくなり、それを清書しては一部を金庫に保管し、他の書類はそのつど焼却するというのを毎年数回繰り返していた。当時シュレッダーなるものが無かったのである。今はパソコンでワープロ、いろんな意味で感慨深いものがある。

次には、隔週に土曜日の午後は図書館で雑誌を読むという習慣が無くなったこと。インターネットによる情報検索や Online Journal と云った情報提供社会の到来は想像も出来なかった。また、海外との文通には10日から2週間を要したが、今では電子メールにて瞬時に行える。夢のようなことが目の前で極く当たり前に行える。

このようなことを思い出しているときが年をとりすぎたことを自覚させられる。定年退職とはこのことを自覚するときなのかもしれない。サミエル・ウルマンの詩「青春」を思い浮かべ口ずさみつつ。



学生諸君に望むこと

前臨床看護学講座 教授

田畑 良宏

滋賀医科大学には、卒後12年目より26年3ヶ月間勤務させて頂きました。

この間、外科学第2講座を振り出しに、附属病院救急部そして看護学科臨床看護学講座と三部門を経て、2008年3月末で退職することになりました。

救急部は私一人の定員で、臨床系講座から交代で半年から一年の任期で2、3名の若い医員の先生方を派遣して頂き、何とか救急部としての仕事を行って来ました。この時、強く感じたことは学生時代に余り勉強せず成績が良くなかった若い医師の方が、学生時代に成績優秀だった医師に比べて、状況に応じて物事を判断し行動でき患者にも好評であり、一方、成績優秀者は自ら状況を判断できず対応も紋切り型で、患者にも不評でした。

看護学科では4年生になると卒業研究があり、毎年2名から7名の学生諸君に研究課題を与えて実験研究の指導をしてきました。看護学科は女性が大部分であったことあるのでしょうか、医学科に比べ真面目で指導はし易かったのですが、自主性が少ないように感じられました。その中で興味深かったのは、本当に

優秀と感じた学生は文章力が高く、ポイントさえ指導すれば立派に論文を書けることでした。

医学部の学生諸君には、卒業時に国家試験が待ち受けており、合格率が大学の評価にもつながるとのことで、上から高い合格率を厳しく課せられているのも事実です。しかし私達、医療人には病める人の気持ちを酌み取り理解できる能力が求められており、医学部では単に医学・看護学の知識を習得するのが目的ではないと思います。勿論、医学・看護学の知識を疎かにして良いと言うのではなく、この知識を生かして病める人に温かく接することの出来る知恵も学んで頂きたいと思います。滋賀医科大学の学生諸君は温和しく個性に乏しく、勉強以外に何も出来ない人が多いように感じています。学生時代には勉強以外にも多くの経験を積まれることを望みます。



看護学科でも、ご支援を

滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座 教授

遠藤善裕 (医2期生)



本年4月1日付で滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座・教授を拝命いたしました2期生(1982年卒)の遠藤善裕です。

1976年に2期生として本学医学科に入學し、卒業後、本学外科学講座(旧・第1外科)に入局しました。当時は、スーパーローテーションもなかったため、今の卒業生がぶちあたる「面白そうだけど、しんどそう」という悩みに、左右されることなく、飛び込みました。研修医時代には、重症患者を受け持つことが多く、ICUも、今のように整備されておらず、患者が入室すれば、受持医が泊まり込むという日々が続きました。労働基準法など、思いもよらぬ時代でした。抗菌薬が進歩した現代でも、感染症の存在が、術前・術後

の状態を大きく左右することを体験し、また、肝不全の治療で、血漿交換を多く経験し、大学院では、侵襲学、人工臓器やアフレススなどを谷先生(現・外科学講座教授)のもとで、研究しました。大学院卒業後は、ほとんど大学にいましたが、国立療養所松戸病院(国立がんセンター東病院の前身)で肝外科の修行を1年、文科省在外研究員として、ボストンとミュンヘンに半年留学しました。

その後、大腸癌や炎症性腸疾患を専門とすることとなり、可能な限り肛門括約筋温存手術を選択し、永久人工肛門を避け、QOLの向上に努めてきました。この頃より、人工肛門のケアや便失禁のケアを通じて看護の方々と仕事をする機会が増えました。また、

「術後も痛くない外科」を目指す術後疼痛緩和と、がん緩和ケアを担当する院内緩和ケアチームの活動も行っています。更に、本学に設置されているオープンMRIを用い、尿失禁、便失禁をはじめ骨盤底筋の構造と機能に関する研究も行っています。今後も、教育・研究において、医学科各講座ならびに附属病院と、有機的連携を図り、地域ならびに国内外に情報を発信していきたいと考えています。また、卒業生で最初の看護学科教授にあたり、母校の発展のためにも努力する所存ですので、よろしく願います。



北の大地とフロンティアスピリット

札幌医科大学医学部解剖学第2講座 教授

藤宮峯子 (医1期生)

2008年6月1日付けで、札幌医科大学、解剖学第2講座の教授に着任いたしました。札幌の6月は風がさわやかで空は真っ青に澄みわたり、色とりどりの花が咲いて、とても美しい季節です。学長から辞令を戴いた時、「先生は、“進取の精神と自由闊達な気風”という札幌医大の建学の精神にぴったりの方だ」との言葉を頂戴してとてもうれしくなりました。本当にここは開学当初から、フロンティア精神に溢れた医療人を多く輩出している大学であります。さらに、58年間の大学の歴史の中で、初の女性教授の誕生とあって私の存在そのものが未開の領域なのです。

第2解剖学講座は、主としてマクロ解剖学を担当する講座で、系統解剖実習や献体の業務を一手に引き受けている講座です。

滋賀医大で前田敏博先生に教えられた篤志献体の丁寧な取り扱いや、系統解剖実習を通じての人間教育など、これまでの経験が大いに活かせる場です。第2解剖学講座は伝統的に、古人骨を用いた人類学的研究と臨床解剖学的研究を行っている教室で、molecularだのゲノムだの再生医学だのというこれまでの私の研究テーマは教室員にカルチャーショックを与えています。しかし、もとより好奇心旺盛で順応性のある私にとっては何でもOKで、教室の従来の研究テーマも教室に出入りしている多彩な研究者達もすべて受け入れて、「人類学から幹細胞研究まで」という幅広いテーマを掲げて、楽しく研究をして行こうと考えています。幸い、札幌医大の研究レベルはとても高く、外部資金の獲得率も高くして研究環境に

恵まれています。また臨床の多くの科が再生医療の研究を活発に行っているため、臨床講座とタイアップしながらトランスレーショナルリサーチの拠点としての解剖学講座を目指したいと考えています。

滋賀医大で学んだ事、解剖学教官として20年間で身に付けた事、基礎医学の研究者として世界を相手に闘った事、しんどかった事もうれしかった事も全部ひっくり返して、すべては札幌の地で活躍するために与えられた貴重な経験だったと思います。新しい教室作りをしていく際に、かつて北の大地を開拓していった人々のフロンティアスピリットに倣って、最高レベルの解剖学講座を創り上げて行きたいと考えています。



これからもよろしく願っています

国立大学法人徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部法医学分野 教授

西村明儒 (医7期生)

2008年4月1日付けで、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部感覚運動系病態医学講座法医学分野教授に就任いたしました。私は、滋賀医科大学7期生で、卒後、直ちに神戸大学大学院に進学し、法医学の研鑽を開始しました。大学院の後、1991年からは、兵庫県の常勤監察医(兵庫県が神戸大学医学部法医学教室内に設置)として、神戸市内を中心とした兵庫県下の死体検案・解剖業務に携わりました。神戸大学や兵庫医科大学の非常勤講師として、学生教育にも携わりつつ、神戸市内三救急病院とのCPAOA症例検討会を開催し、精神医学講座と自殺と遺伝的多型、微生物学講座と異状死と脳内のウイル

ス感染に関する共同研究を行ってまいりましたところ、1995年1月17日、阪神・淡路大震災が発生し、全国の法医学教室から応援をいただいた死体検案チームの責任者として稼働するに至りました。被災死亡者データを分析し、建築部材による外傷性窒息により受傷後短時間で死亡した者が9割以上を占めたこと、病院搬送され、死亡確認した医師が検案した者が少なからず認められたことから、大規模災害時には現場でトリアージを行い救命の可能性のある者だけを搬送する体制でなければ有効な救急医療活動が行い得ないこと、人的被害低減には、救急医療体制の充実はもとより、予防対策が重要であることなどを示しまし

た。その後、滋賀医科大学助教授(1996年4月から2001年9月)、横浜市立大学准教授(2001年10月から2008年3月)を経て、今日を迎えさせていただいております。

今後も認知症や統合失調症などの法医解剖例の死因判定・行為能力の評価に関する研究を継続するとともに、阪神・淡路大震災、ニューヨーク世界貿易センタービル・テロの現地調査、新潟県中越地震、近年の風水害対策に関する調査等の調査結果に基づいた防災に関する提言を行って行きたいと考えております。また、教育、法実務に精一杯努力する所存でございますので、これからもご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

「まず初めに、臨床ありき」

国立大学法人岐阜大学大学院医学研究科精神病理学分野 教授 **塩入俊樹** (医7期生)



本年6月1日付けで、岐阜大学大学院医学研究科精神病理学分野教授を拝命いたしました7期生の塩入俊樹と申します。私は、1987年滋賀医科大学卒業と同時に同大学大学院に進み、精神医学講座の初代教授でおられた高橋清久先生、国立精神・神経センターの高橋清久先生の下で、時間生物学を学びました。院卒後同大学附属病院精神科助手となり、同大学分子神経科学研究センターの犬伏俊郎教授の下、MR医学の精神疾患への応用を我が国で初めて試みしました。1996年3月からは日本学術振興会長期海外派遣研究員に任命され、カリフォルニア大学アーバイン校精神医学講座に留学、更に研鑽を積ませていただきました。1998年11月より、新潟大学医学部附属

病院助手に転任。1999年7月に同講師、2000年8月からは同助教授となり、パニック障害をはじめとした不安障害の病因解明に関する研究をさまざまな新しいアプローチを用いて行ってきました。更に、2006年からは同災害復興科学センターこころのケア分野チームリーダー、2007年からは同医学部こころの発達医学センター准教授も兼任しておりました。尚、2005年には第4回『湖医会賞』(臨床部門)を受賞させていただきました。この場を借りまして、あらためて『湖医会』の皆様方に感謝申し上げます。

臓器移植等に代表される高度先進医療が可能となった一方、価値観や生命倫理の多様化を背景として、より開かれた医療が求められています。また、高度情報化による過

ストレス社会の出現、少子高齢化や過疎化、環境問題等といった諸問題に対し、医療は今まで以上に適切かつ十分な対応をすべきです。大学に籍を置く医療人の職務は、先端的生命科学に関する教育・研究に重きを置きつつも、臨床に直結した疾病の診断・治療に役立つ探索型研究を推進し、地域社会と世界の医療に貢献することです。しかしながら、臨床講座での研究は、世界に通用する研究者を作ることだけが目的ではなく、そうした研究を通して臨床能力を研ぎ、結果的に患者様のためになるものでなければなりません。従って、私が最も大切にしたいことは「まず初めに、臨床ありき」ということです。日常臨床の中に研究の閃きを感じ取れる医療人を輩出できれば、教育者冥利に尽きます。

激動の7年を振り返って

前学長 吉川隆一先生 大いに語る

2001年4月より第5代学長を務められて、この3月にご退任されました吉川隆一学長（当時）と「湖医会」幹事数名が、1月30日に座談会を持ちました。7年に渡る在任期間中にいろいろと成されたこと、思われたことなどについて伺いました。（座談会ではありませんが紙面の都合から主にインタビュー形式にまとめました。）



- 大学改革の嵐に遭遇して -

Q. 法人化前後の大学運営はいろいろなことがあったかと思いますが、ご苦労されたことなど思い出に残りますことは？

私は、2001年に就任して早々に、『遠山プラン』という、前代未聞の大学改革案に遭遇しました。〔1〕国立大の大胆な再編統合、〔2〕民間的発想の経営手法の導入、〔3〕第三者評価の受け入れ、の3本柱でした。〔1〕に基づいて、本学も滋賀大との統合を前提に滋賀大学部増加案などを検討していましたが、その話を本格化して行く前に、県境を越えた統合が課題になり、京都工繊大や京都教育大との4大学統合の話に移りました。そして、2002年に『法人化』の話が出てそれどころではなくなり、2004年4月にととう法人化が実施されました。本学は、この改革に際し、前もって教職員による各種分科会を持ち、「国立大学法人法」「学校教育法」の2法に合わせたあり方を討議し、「約款」を定めました。これにより、これまで「教授会」が持っていた権限は、「教育研究評議会」と「役員会」とを加えて3分され、最終的な決定機関は教授会から理事会（役員会）へと移行しました。これらはかつてない大変革であったために、周知して頂くのに大変努力致しました。

私が教授会に敢えて出席しなかったこと、医療人育成教育センターを作ったこともそうです。前者は、変革の意味を知って頂くためでした。後者は、教育重視の大学にすべく、これまでの各講座が持っていた学生教育や学生補導の権限を集中統一して、役員会直属組織としたものです。また、この年は予算運用の面でも予期せぬ苦労がありました。補正予算や追加補助金の制度が廃止されて、残業手当資金の不足を来たし、対策に苦慮致したのです。この時の課題意識から、会計・総務など事務部門の一層の連携強化と改組を図りました。

Q. これらの態勢は十分に浸透したと思われますか？

まだ、途上にあると思います。いろいろご不満もあるようですが、時代の要請と考えるべきかと存じます。

Q. 新制度のもと、病院の再開発などを行っておりますが、経営状態は大丈夫ですか？

大学病院はもともと赤字経営でした。教育・研究機能を維持するため、不採算部門を持つからです。ただ、これからは、国の財政事情もあり、収益性を高める努力が求められています。そこで、例えば、メジャーサージェリー中心の医療体制、外来部門の段階的縮小、20年後を考えたハード面の整備（病院再開発）などの努力を行っております。補助金も出ますので、収益性の高い態勢を整えていけば、再開発の費用の返済は十分可能と判断しております。また、こうした態勢は医療界の機能分化という県全体の医療の課題とも関連していくことです。

－ 地域医療と大学 －

Q. 県下の医療機関との関わりは変わったのでしょうか？

労働者派遣法に医師が組み込まれた事もあって、県下への医師の派遣については大学がオープンに医師派遣をできるようにになりました。今まで医局教授が個人裁量で行っていた医師派遣を大学の渉外委員会で一元化して、効率よく行うことができるようになります。例え実際の派遣を医局が行っても、公式には大学が派遣することになります。身分もそのまま来ようになります。大学でキャリアを積みたいと思っている人もいますし、そういう人がポストは大学のままで半年間、外の病院へ行ってもらうことも可能です。

Q. 昨今の医師不足に対して取り組まれたことや今後の展望についてお聞かせ下さい。

ようやく今年になり医師不足に呼応して、全国で400人の入学定員増がありました。でも、まだ足りない。県下の医師不足に対して滋賀医大でも定員を増やすことはできるけれど、それには地域に残るという保証がいります。地方自治体の国立大学（病院）への寄付、運用が弾力的になったのもふまえて、県が奨学金を何人か分増やしてくれれば、その分定員を増やすことは可能です。5年間滋賀県に残り貢献してくれれば奨学金を返済する必要はないが、卒業してすぐ県外のどこかに行きたければ全額返済の義務が生じるということです。

産科分野では助産師不足も問題になっています。助産師養成コースを増やしたとしてもやはり地域に残るという担保がいります。奨学金制度と同様です。滋賀医大の看護学科では助産師コースを、県からの委託で8名の枠でやっています。けれど、卒後大半がどこかへ行ってしまう。昨年第一期生が卒業しましたが、結局2名しか残りませんでした。やはり、地域に残るという担保が必要ですね。助産師コースの併設、増員も、看護協会の会長が有識者会議で提案されたら、文科省に持っていきます。

地域の医師不足は入学制度にも関係します。近年の改革策として「地域枠」を設け、県立高校卒の学生を10名程度入学させてきましたが、これに加え、すでに入学実績のある「滋賀県在住で県外の進学校へ通う生徒」を地域枠に組み入れ、県立高校枠を減らさず増員することで、地元へのさらなる定着を図ることも可能でしょう。それともう一つは学士編入枠の拡大、メディカルスクール化です。今の大学入試制度というのは東大を頂点としたピラミッド型で輪切りになっていて、18-19才時で評価したものです。人間の評価は一時点で決まってしまうものではないですし、

数年後に再チャレンジすることは全然悪いことではないでしょう。この時のモチベーションは18才のものより良いかも知れない。こういう枠を増やすとしてもやはり地域に如何に残ってくれるか、そして地域に引き止める魅力があるかが問題です。

今は医局・講座の影響力が小さくなり、卒業生自身が考え、決める時代です。かといって本人で全て決めることもできない。何でも自分のしたいようにできるのかということ。そういう世の中でもない。今は自分で進みたい道が分からないのかもしれない。「湖医会」や卒業生がコンサルタントみたいに話ができるようになればいいですが。

Q. 先生のご在任中には医療人GPなど国からいろいろな教育助成金を獲得されました。新しいものでは「地域『里親』による学生支援プログラム（里親GP）」がありますが、なにかアドバイスなどございますか？

このプログラムは地域の卒業生が学生を支援し、その学生が将来地域医療を担う動機付けにしたいというユニークなアイデアによるものです。これまでの医療人GPと上手く連携して効果があがることを期待しています。このようなプログラムは助成期間が終わるとおしまいということが多いですが、それに止まらず継続していくことが大切だと思っています。そのために「湖医会」が積極的にサポートしてくれるとありがたいですね。

- 愛校心、そして卒業生の活躍 -

幹事A： いよいよ先生も滋賀医大を単立たれるわけですが、母校を想う気持ち「愛校心」というものについて何かお考えをお持ちでしょうか？

学 長： そうですね、愛校心って言われて、すぐに思い浮かぶのは大学にいるときのコマです。僕が阪大の6年間で何が一番印象に残ったかということ、校内ソフトボール大会で優勝して総長から優勝の賞品に一升瓶をもらった。そのコマです。考えたらもっとあるのかもしれませんが、ぱっと思いつくのはそれだけです。それで愛校心を持ってといっているのではないのです。外国に行ったときにみんな愛国者になるでしょ、あれと同じです。日本にいるときは日本をさんざん貶しておきながら、アメリカに住んで日本のことを言われたら真っ赤になって弁護するでしょう。愛校心もそう。いった知らず知らずのうちに育てられるものです。強制された愛校心、というものには反発します。

自然に母校のことを気遣う気持ちが醸成されるようなきっかけが提供されれば、例えば、母校が私を必要としていると卒業生が思えるような、そんな活動を「湖医会」がしてくれるといいと思います。人と人とのつながりで何か母校に役立つ機会を提供してくれることが愛校心を育てることにつながっていくと思います。

幹事D： なにか良い案が、先生にありそうですね。
学 長： 大学に残って校風を作っていくのも大切だけれど、外でそれぞれの場所で活躍するのも愛校心の一つじゃないかな。いろいろなところで大活躍の卒業生の名が僕の胸の中には一杯詰まっているんだけどね。国内外で活躍する卒業生のリストアップをだれかしてくれないかな？！

幹事A： そうか。そういう活躍する卒業生のリストを見て、学生が相談したり、訪問できるようになれば良いですね。卒業生も在校生も嬉しいのではないのでしょうか。

幹事B： 《活躍する湖医会の100人》をホームページへリストアップして、みんながいつでも見られるようにしておくといいですね。

幹事C： 是非実現しましょう。ところで、僕は、いくつもクラブに出入りした経験から学生生活について思うんだけど、人生で一番多感な時期に先生や友人と熱い時を過ごせた、そんな思い出、場所があれば、自然に母校を思う気持ちもできると思うんですよ。

幹事D： 場所といえれば話があるんですよ。学長先生方のご尽力により、学生の福利を目的とした建物を新たに建設することが計画されてるのですが、ここに「湖医会」の事務局を置か

せていただくことになっています。交流室や交流ホールのようなものも計画されていて、学生、卒業生はもちろん、教職員も含めて、自由に語り合える空間として活用していく予定です。いろんな交流方法が考えられますし、「湖医会」の運営上の工夫も大切です。この先「湖医会」30周年も直ぐです。吉川先生も是非おいでください。

学長： ありがとう。楽しみにしています。

では最後に、滋賀医大&「湖医会」へメッセージを

滋賀医科大学学長退任記念講演会で「個性を磨き、特徴を示せ」とお伝えしました。これからの時代は、卒業生一人一人が、他とは異なる「個性」を持つことが大事になります。こうした個性の塊が「滋賀医大の特徴」を作り上げます。しかも、今後の大学にとってはその「大学の特徴」を社会に「示す」ことが大切となります。言い方を変えれば、「SHOW THE FLAG OF SUMS!」と云うことです。

滋賀医科大学の発展と「湖医会」のご繁栄を祈念しております。

(吉川隆一先生は、現在、滋賀県健康福祉部の参与をなさっております。)

【平成20年度版『会員名簿』発行】

名簿発行は「湖医会」の主な事業のひとつです

会員相互の親睦をはかるために、また・・・にお役立てください。

自宅の住所や電話番号は名簿には掲載いたしません。事務局が把握するだけです。

『勤務医師賠償責任保険』

保険料が15%off

ご協力ありがとうございました！



「湖医会」は『勤務医師賠償責任保険』の団体窓口になり加入者の募集を呼びかけました。加入者数により保険料の割引率が高くなるのですが期限内に207名の加入者があり、保険料が15%割引になりました。ご協力、ありがとうございました。

- ・保険料は口座自動引落しで振込の手間入らず
- ・申込手続きは初回のみ。自動更新(予定)で手間入らず

今からでも入れます **随時、中途加入も可能です!**

加入希望者は「湖医会」事務局、または引受保険会社 東京海上日動火災保険(株)
電話：077-510-1470 にご連絡ください。

SUSHI食いねエ

カリフォルニア大学サンディエゴ校
医学部 内分泌代謝科

今村 武史 (医7期生)



はじめまして。7期生の今村と申します。米国に研究留学して10年が過ぎ、留学というよりは留年学?、はたまた、停学か?という今日この頃をカリフォルニア州最南端の町サンディエゴからご紹介したいと思います。



市内のコンベンションセンターでは学会が頻繁に開催されるため、サンディエゴにいられた皆さんも少なくないと思いますが、市内の北部には日系のマーケットに数多くの寿司屋、牛丼吉野家からラーメンチェーン店まで、日本の食材、食事には事欠きません。もっとも、昨年度の長期滞在日本人は全米で37万人、サンディエゴだけでも1万人以上ということですから、これも当然かも。美味しいカリフォルニア米のおかげもあって、我が家の日常の食生活も日本にいる時とほとんど変わりません。



そんな恵まれた環境にあっても、そこは人生の常、思わぬ難題が潜んでいました。それは、日本から来る友人に共通するリクエスト、“アメリカならではのオイシ

イモノ”、がなかなか見当たらないことです。だいたい、アメリカの食べ物として思いつくのが、ハンバーガーに巨大ステーキ、それからー?、ウーン??、オリジナルが無い!という感じです。私も巨大ステーキに挑戦しましたが、巨大さの極みであるテンポンドステーキはそのまま計算すれば4.5キロ!生焼けの肉塊を目の前にやや腰が(お腹も)引けてしまいます。でも問題はその大きさではなく、ステーキ専門店の味付けが塩胡椒のみというところ。これではさすがにすぐに飽きてしまい、“おじさん、グレービーソース知らないの?、エバラ焼肉のタレもオイシイヨ!”と言いたいところを我慢して、巨大肉塊のほとんどを持ち帰るハメになります。重いです。そして、その後しばらく、一家4人の食卓を賑わせてくれますが、これでは話のタネにはなっても、とても“オイシイ(英語です)モノ”としてお勧めできません。そんなある日、ついにアメリカオリジナルのオイシイモノを見つけました。



その名は SUSHI。どこがオリジナルやねん?という声が聞こえてきそうですが、決して寿司ではありません。ここでその実体を皆さんにお知らせいたしましょう。メニューを見ると、まずはお馴染みのカリフォルニアロール。これは日本に逆輸入されて久しいものですが、海苔の黒さを嫌うアメリカ人向けに裏巻き(海苔が内側、寿司飯が外側)にした巻き寿司です。その次はと見ると、キャタピラ(青虫)ロール。表側に巻いたアボカドの青々しさをアオム

シに見立てたもので、中身はうなぎやエビ天など、ニンジンでできたツノまで付いてなかなか幼虫っぽい(写真1)。うなぎの蒲焼ソースをかけて食べるのですが、これがナント結構いけます。サーモン、ツナ(トロ)、アボガド、イエローテール(ハマチ)などをカラフルに巻いたレインボーロール(写真2)や、姿揚げにしたソフトシェルクラブをレタスやマヨネーズと一緒に裏巻きにしたスパイダーロール、その他、うなぎを竜のうろこに見立てたドラゴンロールなども、見た目からは想像できない美味しさ!。中には、クリームチーズにサーモンを合わせて裏巻きにしたフィラデルフィアロールなど、ちょっと戴けないものもありますが、ご当地メニューがどんどん増えつつある中、味探検という楽しさが味わえます。その極めつけが、カリフォルニアロールの上にホタテやエビ、そしてマサゴ入りマヨネーズをたっぷりかけてオープン焼きにしたボルケーノという SUSHI。ここまで来るともはや寿司の原型はとどめておらず、見た目はドリア風。ウーン、これをアメリカオリジナル!という訳で、以来、日本からのお客さんにはもっぱら、寿司ならぬ SUSHI を楽しんでいただいている次第です。皆さんも、アメリカにお出かけの際には是非、“SUSHI 食いねエ”。

(注:初心者?の場合、メキシコ人の SUSHI シェフでは少しリスクが高く、日本人シェフではオーソドックス過ぎるため、コリアンシェフの SUSHI 屋さんがオススメです。)



写真1

写真2

卒後20年同期会(第7期生)に 招かれて



法医学講座前教授 龍野 嘉紹

2008年2月2日琵琶湖ホテルで開催された7期生同期会に、かつて彼らのクラス担任であった私も招待され、7期生の皆さんと先生方にお会いできるのを楽しみにして出席しました。創立30周年記念式典以来久しぶりに滋賀医大の会に出席しました。50数名の7期生の方々と6名の恩師の先生方が出席され、参加者全員のショート・スピーチを聞かせていただきました。いずれの恩師の先生方もお元気でお変わりなく拝見いたしました。

7期生の方の中には、滋賀、京都など地元で働いておられる方、東京都心の病院で勤務あるいは開業されている方、僻地で高齢者医療、在宅医療などに取り組んで頑張っておられる方、当日福島県郡山市や山梨県などの遠方から馳せ参じた方など様々のようですが、皆さんお元気で医学、医療に懸命に取り組んでおられ、まさに働き盛りの年頃という印象を受けました。

かつて、私が1982年に神戸大学から滋賀医大に赴任してきた当時、学長の脇坂行一先生から「神戸大学の学生と比較して滋賀医大の学生はどうですかネ」と尋ねられ、「総じておとなしいですネ」とお答えしたことを思い出します。それは良い意味で、おだやかで落ち着いた印象でお答えしたのですが、今回の同期会の印象では「快活ですネ」という感じでした。

7期生の皆さんの益々のご活躍を願っています。ご招待をいただきありがとうございます。



方はタフだなあ。」と思いました。同期でも金子さんと根本さんの長老達は変わりませんね。外見の事はその辺として、皆それぞれ活躍しているというか、忙しくまた重圧に耐えて仕事をしてるなあと感じました。(特に産婦人科の先生方お疲れ様です。)会場の琵琶湖ホテルに宿泊の手配もお願いしていたので、2次会の後も遅くまで語り合うことができよい思い出になりました。新しい琵琶湖ホテルはきれいで安くてよいですね。(特別料金だったのでしょうか。)

朝起きたら雪景色でちょっと感動しました。幹事の皆様、「湖医会」事務局の皆様お疲れ様でした。30周年も出席します。大津市周辺に勤務していればお手伝いもします。医療にもっとお金と人手をつぎ込むような日本に変わるまで、医療崩壊がさらに進まないよう一緒にがんばりましょう。僕も同期会でちょっと元気をもらいました。ありがとう。

「最低最悪そして最高の7期生」



小菅医院多賀診療所 小菅 眞由美

“今年って、卒後20年の同期会だよな。”と思ってはいましたが、何ら気配もなく“ひょっとして、うちの学年は無いのかも・・・。”と、さすがに心配になった頃にやっと連絡が入り、2008年2月2日、無事同期会が開催されました。ギリギリにならないと取りかかれず、それでも一応帳尻を合わせてしまうという7期生の特徴が、20年経っても残っていたわけです。

我々7期生は、授業は無視、態度はいい加減、当然でも悪いと、先生方の評判は最低最悪でした。あまりの出席率の悪さに翌年から出席を取り始められた先生も多く、“7期生が通った後にはペンペン草も生えない”とも言われていた様です。けれど、居心地の良いそして時には熱い学年だったと思っています。医師として20年が過ぎた今、絶滅危惧種といわれる産科で踏ん張る者、患者が選ぶランキング上位の者、地道に地域医療に奉ずる者、立派な肩書きを持つ者、皆の近況を聞きながら、“それぞれ形は違えど私たちだって結構頑張っているよね”という思いがわいてきました。

20年前のかわいい女子学生も、目尻のシワは増え、老眼に苦しんでいますが、女性であるがための悩みや苦勞を乗り越えてここまでやってきたという自信に満ちているように思いました。

50名以上の同期生と6名もの先生方に参加していただいた楽しい会は、一瞬の夢のように終わってしまいました。10年後の再会を楽しみに、また日々精進したいと思います。最後に、在学中、卒後も含め私たち7期生を支えてくださったすべての方に感謝したいと思います。

卒後20年同期会に参加して



市立池田病院 臨床研修部部長 兼 内科部長

梶原 信之

ここ数年で、髪の毛がかなり白くなり体重も学生時代より十数キロ増えた僕としては、皆に何と思われるか少し怖い気持ちは持ちながら、2月2日の卒後20年同期会に出席させていただきました。見渡してみると、僕以上に老け方が早く見える人もいれば、あまり変わらない人もいてそれぞれでした。

脳外科松田先生、生化野崎先生、薬理戸田先生、法医龍野先生、数学寺田先生、生物土井田先生の6名の先生方にも出席していただきました。それぞれに私が個人的にも御世話になった先生方ばかりで懐かしく思うとともに、皆20年の歳月を感じさせない様子で「やっぱり教授になるような



卒後10年同期会に参加して

長浜赤十字病院 内分泌代謝内科

児玉憲一

丁度 10 数年前の入学式の日もそうだったように、同期会に参加した日も妙に緊張してしまいました。昔から人見知りか激しいのは全然直りません（実際に病院で仕事していると、ちっともそんなことはない（つもり）ですが）。でも会場のホテルに入ると、懐かしい面々が声をかけてくれてほっとしました（そういえば入学式の時も相手の方から声をかけてくれてほっとした記憶があります）。もっと皆の姿形は変わっていると思っていたら、予想外に変わってなくて驚きました。ただし中身は大きく変わっていて、研究している方、臨床している方、開業された方、そしてお母さんやお父さんにもなっている方等みんなそれぞれ色々な分野・ステージで頑張っておられるのがよくわかり、とても励みになりました。

勿論よいことばかりではなく、このままでいいのかとか、仕事があまくいかないとか、家庭・家族の問題など、色々な悩みやトラブルを抱えていたり、あるいはこれからぶつかりたりしていくのでしょうか、お互いに助け合える同期会であれば、と思います。お医者さん業もなかなか（とてもとても）大変な時代ですが、皆元気でやっていきましょう。最後になりましたが、御忙しい中幹事をして下さった諸先生方、「湖医会」事務局の方々、写真部の学生さん等スタッフの皆様本当にありがとうございました。

同期会に参加して

京阪奈病院 循環器科

山内 亮子



私たち 17 期生の同期会は、2008 年 2 月 16 日、琵琶湖ホテルで行われました。卒業後初めて再会するクラスメートも多かったのですが、皆ほとんど外観は変わりなく、しぐさ、話し方で変わっていないな～と思わず笑ってしまいました。すっかり「先生」という呼び名になれてしまった私たちですが、「○○ちゃん」と学生時代のあだ名で呼ばれたときは、とても懐かしく、気分はすっかり学生時代に戻っていました。

参加者の近況報告では、一人ずつ前に立って話をしたのですが、幹事の方々の粋な計らいで、受験票と卒業アルバムの写真スライドが同時に映し出され、懐かしい顔写真に会場がドット沸くことが度々ありました。仕事、妊娠、育児など、いろんな状況でがんばっている同期生の話は、バラエティーに富んで大変興味深く、様々な人生経験を聞くにつけ、10 年という月日の長さを実感しました。

卒後10年同期会 医学科 17期生



そういえば、入学式のとときに、「一隅を照らす、これ即ち国宝なり」という訓辞を受けたのを覚えていますか？本学に学んで世に出る私たちが小さいながらも明かりを灯す人であって欲しい、そんな願いがこめられているわけですが（湖都通信 48 2005.6.30）、各々がそれぞれの領域でこの言葉を実行しているのを感じました。今回の卒後 20 年の同期会が今から楽しみです！

最後になりましたが、同期会準備のため、ご尽力くださった幹事の方々にお礼申し上げます。申し上げます。

同期会に出席して

滋賀医大病院 呼吸器外科

藤田美奈子



2月16日私は子供を連れて参加させて頂きました。みんなに会った印象は、男性陣は全体にふっくら、女性陣は変わらずといったところですが、でも、老けた訳ではない、堂々とした自信といったものではないか、学生の時には無かった風格がそれぞれに感じられました。研修を積みながら親の残した病院の経営再建をしている人、夢を叶えた人、転科をした人、開業した人、カナダで臨床をしている人、学生時代を共に過ごし、今も同じ医師と言う職業ですが、実に様々な人生をそれぞれに歩んでいました。女性同士のおしゃべりでも、キャリアを積んでいる人達は、キャリアを積むが故の悩み・思いがあり、出産育児をした組もそれはそれでまた別の思いがあり、話は尽きませんでした。また、「先生」と付けずに呼び合えるので、しばし学生の頃にタイムスリップしたかの様でした。みんなのスピーチは聞きたいし、でも話したいしで本当に瞬く間に時間が過ぎました。私は1次会で後ろ髪を引かれる思いで子供に背中を押されて帰路につきましたが、きっと皆さん2次会ではさらに話の花が咲いたことでしょう(割り箸も割っていたかも?!)。この次顔を合わせるのはまた10年後、みんなのような道を進んでいるのか楽しみです。これを読んでくれている17期生のみなさん、10年後お会いしましょう！今回来れなかった方も今度は来て下さいね。最後に幹事をしてくれた加藤さん、金崎さん、坂口さん、四方さん、司会をしてくれた岡君、写真部のかわいい女の子達、そして「湖医会」のみなさん、お忙しい中ありがとうございました。

看護学科6期生の皆さんお久しぶりでした

基礎看護学講座

今本喜久子



卒後5年同期会へのご招待有り難うございました。幹事役の赤沢仁美さんと塩田裕美さんが私のゼミ生であったことがご縁で招待して頂き、思いがけず多くの6期生の皆さんに再会でき、楽しい時間を過ごせました。

当日2月9日はこの冬一番の大雪で、瀬田周辺でも積雪が十センチもありました。悪天候にも拘わらず、27名もの6期生が遠くから石山のぼるた亭へと集い盛会であったことを何より嬉しく思います。

どこかに学生時代の面影を残した皆さんが、当時のニックネームで呼び合いながら談笑する姿は昔と変わらない一面でしたが、近況報告を拜聴するにつれ、卒後5年は短いようで長い歲月であったと改めて感じました。

職場では新人ナースの教育を任される程に成長された皆さん。時には人間関係に悩み、看護のあり方に悩み、中には転職も経験し、新しい可能性に挑戦している皆さん。婚約や結婚のご報告、子育ての喜びの報告もありました。「付き合っていた彼とは別れました」と辛い話をさらりと報告した方の明るい表情は素敵でした。あれもこれもきっといい経験になるでしょう。看護師、保健師、養護教諭そして自分が選んだお仕事を大切にしながら自分の幸せをみつめて育てて下さい。

私の教員生活は残り1年になりました。この一年はゆとりを持って教育を楽しむつもりです。いつかまたご縁があったら皆さんにお会いできれば嬉しいです。どうぞお元気で。



卒後5年目を迎えて

京大病院 看護師

木村 裕美(旧姓:塩田)

今年の看護学科6期生同期会は、卒後5年という節目の年となり「湖医会」のご協力の下、2月9日石山「ぼるた亭」での開催となり、私も幹事の一員として参加させていただきました。また、私達6期生が在学中に、学年主任をして頂いた今本喜久子教授にもご参加頂き例年にも増して賑やかな同窓会となりました。この日は本当に寒い

一日となり、近畿地方にも雪が積もり参加者の足に影響が出るのではと心配されましたが、交通には大きな乱れもなく集うことが出来ました。

今年は、可愛い2世ゲストを連れての参加や、新しい職場での活躍の報告、結婚の報告も多々あり、やはり卒後5年を経ると同期生それぞれの人生には重みも増し、刺激を受けることばかりでした。会の途中には、大学入学当時の写真をスライドで映す試みもあり、その頃の思い出と重ね合わせながら、近況の報告を聞いていました。

私なりに、この5年を振り返ると本当に早かったと思うのですが、個々の生活においても大きな変化があった5年間だったのではないのでしょうか?これまでに得た経験は大きな糧となり、これからの人生において発展させていくことが出来ると思います。そういう意味で、この節目の年に、この様な会が持てたことをとても嬉しく思い、そしてまた同期のみんなと再会できる日を励みに、明日からの自分にもエールを送りたいと思います。

卒後5年同期会に参加して

岐阜県立看護大学

地域基礎看護学講座 助手

井手敬昭



今回で私たちの同期会も5回目になり、今年は「湖医会」のご協力もあり、盛大に開催することができました。今回の同期会に参加して、みんなの“結婚しました報告”や“します報告”にびっくりしていました。「3日前に入籍しました!」という報告とか、「名前変わってる?!」とか、「子ども大きくなったなあ〜。」とか、話していました。(うちの子もかわいかったっしょ! (笑))

また一方では、「まだ必死にこらえて、同じ病院に勤めています!」とか、「転職して今は企業にいます。」とか、仕事の近況も聞けました。ひとつのことを継続させていくこともすごく大変でつらいことだと思し、新たな職種に就いて新たに始めるというのも大変なことだと思います。みんなそれぞれの道でがんばりながら進んでいるんだということが知れました。

私たちは、みんなの努力と熱意でもって毎年同窓会を開催できています。この会は毎回、すごく楽しくて、元気をもらえるので、参加するのが楽しみです。これからもずっと続けていけたらいいなと思っています。滋賀から離れた所でがんばっている仲間もいると思うけど、何年かに1度は参加して、近況を教えてほしいなと思います。来年は2月14日というビミョーそうな日に開催予定ですが、みなさんぜひ参加してくださいね!

最後に、今回の同期会の幹事をしてくれた2人と「湖医会」事務局のみなさん、そしてお忙しい中ご参加いただきました今本先生、本当にありがとうございました。

交流懇談会を終えて

この企画は「湖医会」がサポートしています…

看護学科生の進路の参考になればと企画された「卒業生と在校生」の貴重な『交流の場』。今年は、2月16日(土)と4月17日(木)の2回に分けて行われました。いろんな分野で活躍する先輩達が参加してくれて、「看護学科の輪」が広がっています。その輪の様子を紹介します！



交流会に参加して

滋賀医科大学附属病院6A病棟勤務

山下 祥 (看6期生)

今回、3年振りに交流会に参加させていただきました。3年前は国試の勉強方法や卒論などについて聞かれた記憶があるのですが、今回は助産学を専攻された学生さんとお話させてもらって国試や卒論以外のことでたくさん質問してもらいました。そのことで、私が助産師を目指したきっかけやどんな助産がしたかったのか、などということ思い出すいい機会になりました。また、学生さんの自己紹介を聴いて、それぞれの学生さんの思いを知ることができ、「未来の助産師さん」を頼もしく感じました。これから実習や卒論、国試勉強など大変なことが待っていますが、みんなで楽しんで乗り越えてほしいと思います。自分が感じていることや疑問に思っていることを伝えることができる、というのはすごく大切なことだと私は思います。卒業して働き出してから、その「感受性」をずっと持ち続けてほしいです。そして素敵な助産師さん、看護師さんを目指して、いつか一緒に働けると嬉しいです。今回はとても楽しい時間をありがとうございました。これからも頑張ってください。

4月17日の様子



助産師の山下 祥(6期生)が参加してくれました！

不安が解消されました

金田 美咲 (看4回生)

交流会では、看護師や保健師、養護教諭など様々な職種の卒業生の方の話を聞くことができました。国家試験や就職活動についてのアドバイスから、看護職として働くことのやりがいや厳しさまでざっくばらんに話してくださったので、自分が今後看護職としてどのような道に進んでいけばよいのか決める上でとても参考になりました。私は交流会に参加するまで、あと一年で自分が社会に出て働くという現実があるにも関わらず、この一年間で何をすればよいのか、ほとんど何もわからない状況で不安でした。しかし働いている方と直接接することで、疑問や心配に思っていたことが解消でき、嬉しく思うと同時に頑張ろうという意欲がわき、この会に参加して本当によかったと思います。

私は今回の交流会を開催するにあたり、準備する段階から関わってきました。当日までは交流会がどんなものになるのか想像がつかず、不安なことも多かったのですが、お忙しい中交流会に参加してくださった卒業生の方々、協力くださった先生、「湖医会」の方々のおかげでとても有意義な会となりました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

交流懇談会に参加して

崔 栄子 (看4回生)

今回交流会懇談会に参加させていただきましたが、交流会は堅苦しいものではなく、とても和やかな雰囲気で大変話しやすい環境で行われました。私はこの交流懇談会に参加したときには、看護師になるのか保健師になるか、またその他の看護職につくのか、どこで働きたいか全く決まっていませんでした。また卒業して働くということが、とても先のことのように思っている自分があり、あまり深く進路について考えようとしていなかったように思います。交流会では様々な年代・職種の先輩方にきていただき、少し疑問に思っていたことから国家試験の勉強方法まで様々な視点からの助言をいただき、もう一度自分の進路に真面目に向き合おうと思うことが出来ました。そしてなによりこの会に参加くださった方は滋賀医大の卒業生なので、学校のスケジュールに合った勉強方法を聞くことも出来、また卒業生以外の人には聞きにくい事でも聞くことが出来たのが良かったのではないかと思います。

学校以外ではなかなかこのように働いている方の現状を聞く機会はないと思うので、今後も交流会は学生が進路を考える上でとても有意義なものになると思います。

2月16日の様子



小澤 佳奈子(8期生)・植村 珠名(9期生)・藤田 京子・吉岡 知美・河北 のゆり(10期生)のみなさんが参加してくれました！



猪飼秋夫(医8期生) 岩手医科大学附属循環器医療センター 心臓血管外科 准教授



1988年3月:滋賀医科大学医学部卒業
 1988年6月:京都大学医学部附属病院 心臓血管外科
 1990年4月:静岡県立こども病院 心臓血管外科
 1998年8月:京都大学医学部附属病院 心臓血管外科 医員
 2000年4月:同上 助手 勤務
 2001年6月:University California San Francisco, Department of Surgery
 Division of Cardiothoracic Surgery, Research Fellow
 2001年11月:Stanford University, Department of Cardiothoracic Surgery, Division of
 Pediatric Cardiac Surgery, Research Fellow, Clinical Instructor
 2004年12月:静岡県立こども病院 心臓血管外科
 2007年1月:岩手医科大学附属循環器医療センター 心臓血管外科 講師
 2008年4月:岩手医科大学附属循環器医療センター 心臓血管外科 准教授
 現在に至る

2008年4月1日付で岩手医科大学心臓血管外科准教授を拝命いたしました8期生の猪飼秋夫です。岩手医大は、岩手県に唯一ある創立80周年を迎える私学!!の医科大学です。ここに東北の循環器医療をリードする附属循環器医療センターがあります。ベッド数115床で、循環器科、心臓外科、麻酔科、小児科、放射線科それぞれが循環器に特化したチーム医療を行う施設です。私はここで先天性心疾患外科治療のチーフとして、優れたスタッフと共に、日々診療、教育に携わっております。今は次世代の外科医を育てながら、一人でも多くの子供と親の笑顔が見られるように頑張っております。今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしく申し上げます。

★住所・勤務先・肩書き等に変更がありましたら事務局にご一報ください

ご案内

第10回 関東支部会のご案内

- 1、日時:8月23日(土) 午後5時30分
- 2、開場:品川プリンスホテル「品川大飯店」 tel 03-3440-1111
- 3、講演:獨協医大精神神経医学教室教授 下田和孝氏(医3期生)
演題「オーダーメイド薬物治療について-Pharmacogenetics、Pharmacogenomicsの展望-」
- 4、講演:徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
感覚運動系病態医学講座法医学分野教授
西村明儒氏(医7期生)
演題「死者から学ぶ防災対策」 終了後懇親会
- 5、研修医・看護学科卒業生・学生は無料

「藤原よしみ奨学金」

藤原さんからお便りが届きました!!

梅雨のうとうとい日々、アジサイが花をつけはじめました。先日はご多忙のところ、ご丁寧に「奨学金」のご報告をいただきありがとうございます。また、奨学生のOさんからの手紙確かに受領いたしました。

今まで「奨学金」をご利用いただいた方から、留学先からのお便りや、ご活躍の様子などお知らせとお礼をいただいたりして、私達のささやかな思いが生かされていて心から感謝しております。何かご協力できることがあればお申し付けいただければ幸いです。

末筆ながら「湖医会」の皆様方のご健勝とご発展をお祈りいたしております。今度ともよろしく申し上げます。



「藤原よしみ奨学金」とは..

医学科6回生在学中にわが子(藤原よしみさん)をヘルペス脳炎で亡くされたご両親が「志なかばで逝ってしまった娘の夢を繋いでほしい」と「湖医会」に多額の寄附をしてくださいました。その意志にお応えし、「藤原よしみ奨学金」として自主的に活動する学生に資金的なサポートをすることとなりました。

「西医体」応援キャンペーン応募方法

- 1、一口・・・¥ 3,000
- 2、振込先・・・びわこ銀行草津南支店
店番号 213
普通 口座番号 579431
滋賀医科大学同窓会、湖医会学生サポート

燃える夏、部活で頑張るアスリートへ先輩からの、冷たいドリンクを差し入れる企画です。ドリンクのボトルまたは粉末入り袋に、氏名・期生・勤務先を書いたシールを貼って、寄附していただいた先輩の応援の声を伝えます。あの頃の自分を思い出しながら、ぜひご協力ください!!

訃報

平野香樹君(医1期生)を偲んで

医療法人啓生会 理事長 安田雄司(医1期生)

彼は同じ滋賀医大1期生で、卒業後同麻酔科に入局した。入局直後助手となり外科医からみても頼もしい麻酔管理をしてくれた。大学を去り、いくつかの病院を移った後、佐賀県出身の彼が北海道僻地の委託診療所の医師として北の大地に渡った。彼は温厚な性格だが、酒が入ると一変する。好きな石川さゆりのレコードを一晩で壊すし、最初の若鮎祭では転倒して意識不明になり救急車で搬送された強者である。昨年6月二十数年ぶりに再会した。胃癌の再発と言ったこととで自宅静養中であつた。旭川空港で別れたとき何時までも手を振ってくれた。その時の目は一人の患者になつていった。彼のような人間味あふれる医師が去つた。心よりご冥福を祈る。

ご寄付のお礼

医学科7期生有志/医学科17期生有志

同期会の余剰金を「湖医会」奨学金と一部を事務局の備品等の購入に充当させていただきました。

ありがとうございました。厚くお礼申し上げます。



ご協賛
ありがとうございます

株式会社三和化学研究所
ヤマサ醤油



中外製薬株式会社
日本ケミファ株式会社



ヤンセンファーマ株式会社
(順不同)